

【研究者】

李 仁子

【所属機関および職名】(助成決定時)

東北大学大学院教育学研究科 講師

【研究題目】

北朝鮮帰国運動が在日コリアンの家族とコミュニティに及ぼした影響に関する研究

【研究の目的】

帰国運動が生み出した新たな離散家族の姿を、以上のような点から実証的に明らかにしていくことが、本研究の第一の目的である。北朝鮮帰国者をも含めた在日コリアンの戦後史を、個別の地域コミュニティに関して跡づけること、これが本研究の第二の目的である。

【研究の内容・方法】

本研究の主な方法は実際に家族で北朝鮮に帰国した人がいる在日コリアンを対象に聞き取り調査を行い、彼らの家族史をまとめる。調査対象者は研究者が以前からフィールドとしている東京荒川区と大坂の生野区の在日コリアン家族達と彼らの出身地である韓国済州島の親族とする。帰国者の家族はもちろん、その親族にまで調査を必要とする理由としては在日コリアンの生活が韓国の親族と親密な関係をもっていて、お互いが大きく影響しあっているからである。特に、親族の中で北朝鮮に帰国した者を持つということは韓国国内では大変敏感な問題であり、政治的に厳しい境遇におかれる場合が多い。韓国済州島における帰国者家族・親族は在日とはまた異なる家族史を歩んできたと思われる。

このように帰国者を身内に持つ在日離散家族と韓国内の親族に対する聞き取り調査のみではなく、帰国者本人達の声も反映する。というのは、現在北朝鮮から脱北する人々の中には日本から北朝鮮に帰国した在日帰国者の存在が何人か確認されている。彼らの声を直接聞き取ることは帰国者の家族史をより正確的・実証的に書き上げることになるに違いない。

このような、多角的な聞き取り調査と共に、在日コミュニティの資料を収集し、地域コミュニティにおける帰国者の活動と帰国後のコミュニティの対処などについて検討する。さらに当時の歴史的状況を知るため、帰国運動を推進していた朝鮮総連と、それを阻止しようとした民団、そして帰国運動の実現のために動いていた日本赤十字社などの機関や組織の記録や証言を収集して、当時の動きを把握していくことにする。

【結論・考察】

国土を分断され、今もイデオロギ的に対立している韓国では、離散家族の問題を単純な過

去の問題にすることはできない。同じく、在日コリアンにとっても離散家族の問題は続いているのである。本研究は今まで在日コリアン史の中で言及されることがない、隠された歴史としての帰国運動と、それを取り巻く在日の世界を歴史人類学に考察した初めての研究と言えよう。調査者は助成を受ける間、たくさんの帰国者家族と会い、彼らの苦悩や彼らにとっての家族観・民族観・国家観を聞き取ることができた。彼らの現代的離散家族としての姿を明確に、そして実証的描き出すことで、在日コリアンの戦後史を再構成することができた。特に、政治的混乱によって歪曲を受けやすかった在日コミュニティの歴史の中で帰国者達の役割や活動を正しく評価することは、在日社会の歴史全体を見直すきっかけとして大きな成果を成したと言える。